

機能は改善した。2回とも入院直後に脳梗塞を発症し、脳血管撮影で類もやもや病と診断された。待機的に血行再建術施行の方針。

【考察】パセドウ病合併類もやもや病は脳虚血症状を認める例が多く、甲状腺機能亢進時に脳虚血症状が出現・増悪したという報告が複数ある。本例も甲状腺機能亢進時に脳梗塞を発症し、甲状腺機能改善後は脳梗塞の再発を認めていない。

4 甲状腺穿刺吸引細胞診後に一過性びまん性甲状腺腫脹を呈した1例

山田 貴穂*、***・岸 裕太郎*、***

小松 健*、***・黒崎 功***

曾根 博仁*

新潟大学医歯学総合病院 内分泌・代謝内科*
新潟白根総合病院 糖尿病・甲状腺科***

症例は52歳、女性。アレルギーなし。

【経過】ドックの頸動脈エコーで甲状腺左葉の腫瘍を指摘され当科受診。甲状腺左葉に軟な腫瘍を触知。甲状腺関連の血液検査は異常なし。エコーで左葉下極に12.3×10.6×21.1mm、内部等～低エコー不均質、一部嚢胞変性と点状高エコーを伴う内部血流が豊富な腫瘍を認め、穿刺吸引細胞診を施行した。穿刺後のエコーで両葉全体の腫大とひび割れ状の間隙 (crack) が出現。crack 内部の血流や周囲への血腫形成はなかった。視診上の腫大、疼痛などの自覚症状なし。30分程度の冷却で増悪がないため、PSL5mgを3日間内服とし帰宅。1週間後にはcrack等は消失していた。細胞診は良性。

【考察】甲状腺穿刺吸引細胞診後の一過性びまん性甲状腺腫脹の多くは穿刺後数分以内に生じ冷却等で改善するが、中には遅発性の腫大や挿管管理を要する重症例もあり、稀ながら注意を要する合併症と考えられた。

5 2018年度に当院で診断した甲状腺濾胞癌の検討

宮腰 将史・井上 浩子*

筒井内科クリニック

新潟県保健衛生センター*

濾胞癌は、肺、骨などに遠隔転移をきたせば、その予後は乳頭癌に比べ不良とされている。しかし、超音波検査と細胞診で診断可能な乳頭癌に比べ、濾胞癌の診断は容易でない。

2018年度に当院で確定診断された甲状腺悪性腫瘍の組織別頻度は、濾胞癌が22%と日本の平均よりもかなり高かった。濾胞癌の正診率が高いことが示唆される。

2018年度に当院で診断された濾胞癌は9例で、微小浸潤型が8例、広汎浸潤型が1例、その中で低分化癌が3例であった。それぞれ、腫瘍径、増大傾向、サイログロブリン、細胞診、Bモード像、エラストグラフィ、ドプラー法について検討を行った。

9例すべてにおいて、Bモードで腫瘍内部エコー不均質、境界部低エコー帯の不整など濾胞癌の特徴を認めた。また、1例以外はすべて増大傾向だった。ほかの項目は、濾胞癌に特徴的な所見を示さない例も多かった。

Bモード所見で過去の画像と比較することは、濾胞癌の診断に有用であった。

6 変形性関節症に対するエルカトニン筋注の使用経験

中村 宏志

中村医院 内科

変形性関節症の患者22名を対象に、エルカトニン10単位を筋注し、その効果について検討した。変形性関節症患者22名(高血圧症10名、糖尿病8名、脂質異常症4名)を対象に、エルカトニン10単位を週1回3ヶ月筋注射し、その効果について、質問紙法で評価した。エルカトニンの筋注により、疼痛は1-3ヶ月後に改善していた。エルカトニンの筋注が変形性関節症の痛みに有効であることは確認できたが、その機序については、